

談話の展開の2つの型

佐藤 勝之

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

1. 序 論

テキストを過程(process)と見る視点¹から談話の流れを追っていくと、一般に、後続する節が先行する節の情報を累積・集約するというパターンを繰り返していることが見て取れる。例えば、ある節の1つの名詞類が次の節の同一形式の名詞類によって指示されるときに、単に同じ情報内容が繰り返されるのではなく、先行節の情報全体が何らかの形で次の名詞類登場の前提になり、さらにその名詞類に取り込まれているということが分かる。

本論では、この一般的な談話の展開のパターンをまず定式化し、このヴァリエーションとしてさらに2つの談話の公式を提示する。これらの公式は「微視的」²な観察から識別された2つの談話の型、すなわち、「叙述型テキスト」(predicative text)と「指示型テキスト」(directive text)に対応するものである。

2. 談話の展開の定式化

まず、談話/テキストに関して一般に了解されていることは、根本的に言って、1つの節³から次の節へと談話が進展するというのは、先行する節で提示された情報に後続する節が新しい情報を加えるということである。(ここで「情報を加える」というのは、前言の修正や否定、関連する話題への転換などを含めて最も広い意味で言っている。)⁴ そうだとすれば、先行節は後続節にとって「与件」であり「前提」である。⁵ そして後続節は、先行節と何らかのつながりを持つものだから(そうでなければ「テキスト/談話」とは言わない)、そのつながりを示す何かしらの要素を含んでいると考えられる。⁶

認知論的に言うと、先行節の情報はその提示の最中は「過程」であるから、「未確定」の「事象/出来事」であるが、これを与件・前提とした後続節との関係では、先行節で述べられたことはすでに「結果」であって、「確定」した「事態/もの」として扱われる。というのは、そうしなければ、これの上に新たな情報を付加して修正したり、否定したりする操作を加えることができないからである。⁷

さらに Jespersen(1909-49)の用語法で言い換えるならば、先行節では情報は「ネクサス」の形で提示されるが、後続節ではこれが「ジャンクション」の形ないし付加詞を取り去った名詞・代名詞の形へと集約され、これが新たな述部を伴って新たなネクサスを形成し、談話を展開していくのである。

さて、以上のようなごく一般的な談話の展開のしかたを試みに公式化してみよう:

(1) (i) $[N_1 + V_1]$ (ii) $[[A_1 + N_1]_2 + V_2]$ (iii) $[[A_2 + N_2]_3 + V_3] \dots$

(ローマ数字は節の順序を示す; 母型(外側)の角括弧は当該節全体、埋め込まれた(内側)の角括弧は先行節(の情報内容)を示す; Nは名詞類(nominal), Vは動詞類(verbal), Aは付加詞(adjunct)として機能する要素を示す(Jespersen では付加詞は「二次語」に限られるが、ここでは「三次語」も含めて考えたい)。なお後に述べるように、「叙述型テキスト」では多くの場合、Nは主部、Vは述部に相当するが、「指示型テキスト」ではVが述部動詞、Nがその目的語に相当する。)

第1節で提示された名詞類 N_1 は第2節へと引き継がれ、第2節の名詞類 N_2 として機能するが、そのとき前節で同時に提示された V_1 の要素が付加詞となって付き従う($A_1 + N_1$)。その際、限定詞を伴ったり代名詞に置き換えられたりする。この公式を例(2)で具体的に示そう:

- (2) a. I found a scorpion last night. It was in the park. It was very big ...
b. I found a scorpion last night. The scorpion (I found (last night)) was in the park. The scorpion (I found (in the park)(last night)) was very big ...
- (2') (i) N₁: a scorpion; V_i: I found last night
(ii) N₂: the scorpion I found last night; V_j: was in the park
(iii) N₃: the scorpion I found in the park last night; V_k: was very big

(丸括弧は、付加詞がテキストの表層では義務的ではないので省略可能なことを示し、多重丸括弧は最も内側のものが最も省略されやすいことを示す。)

注目すべきことは、表面上省略されているが、あるいは代名詞に置き換えられていると、後続するNが先行する節のVの情報を取り込んでその内部に蓄えているということである。テキストの結束性を論じるときにこの観点が必要不可欠であると思われる。(このことは後で具体例によってさらに検討する。)⁸

このことに関して、次の1組の例文を参照したい。

(3) Mary killed Tom. That she killed him/The murder/The act/That/It surprised me very much.

(4) Mary killed Tom. The woman who killed him/The murderer/She surprised me very much.

例(3)と(4)は、先行節の情報全体が後続節に引き継がれていることに変わりはないのだが、後続節で何を主題にするかという点で異なっている。すなわち、「メアリがトムを殺した」という出来事の中で、(3)は行為全体を問題にして、これについてコメントする形をとるが、(4)はこの出来事を生じさせた行為者に焦点を当て、この人物について論評するという展開を示している。(4)の後続節の主語は、'who killed him' や 'murderer' という表現から明らかのように、決してMaryという語彙項目だけを指示しているのではないのである。

さて、既知情報に新情報を加える形で進んでいくのが無標の談話の流れなので、先行情報の集約は、上の例のように「主題」(theme)の位置に起こりやすいが、「題述」(rheme)の中にも生じうる：

(5) a. Wash the fish, cut ϕ into pieces and place ϕ in the pan.

b. Wash the fish, cut (the washed fish) into pieces and place (the (washed) fish cut into pieces) in the pan.

(5') (i) N₁: the fish; V_i: wash

(ii) N₂: the washed fish; V_j: cut into pieces

(iii) N₃: the washed fish cut into pieces; V_k: place in the pan

とくに調理法のテキストでは、先行節のNが後続節でゼロ形態によって置き換えられることがよく起こる(これは後で述べる、目的語が表示する指示対象の様態の変化と関係があると思われる)が、例(5b)からよく分かるように、先行する節の情報全体をそのゼロ形態が担っていることに注目したい。⁹

3. 2つの談話の型

ところで、上の2種類の例は、独白形式のテキストの、2つの典型を示していると考えられる。これらをあらかじめまとめて述べると、それぞれ次のような特徴を持つと言える。第1の型は、新聞・雑誌の記事や小説等「物語」のジャンルに属するテキストが典型的なもので、形式上は平叙文の連続、内容的には「出来事の報告」や「登場人物・場面の描写」である。したがって、(仮想現実を含む)外界の指示対象はテキストに先立って存在し、テキストの展開によって左右されないが、しかし、記述の増大に連れて指示対象について読み手/聞き手が頭の中に形成する像(心象)は変化する。この談話の型を「叙述型テキスト」と呼ぶことにする。一見、新聞記事という『事実の報告』と物語という『虚構の描写』を同じ範疇に入れることが不自然に見えるかもしれないが、実は、テキストを読み/聞きながら心的世界を徐々に構成していく中で、読み手がその世界を自分の解釈作業以前に存在するものと想定している点では、これらは同じなのであ

談話の展開の2つの型

る。つまり、前者は「私が知る前から現にある事実」であり、後者は「私が読む前からある、作家が作り上げた世界」なのである。(違うのは、読み手はその世界の『現実としての存在』を、新聞記事については信じているのに対し、小説については信じていない(あるいは『作り事として』信じている)ということである。)このことを例(2)を使って映像的に図に示すと次のようになるだろう:

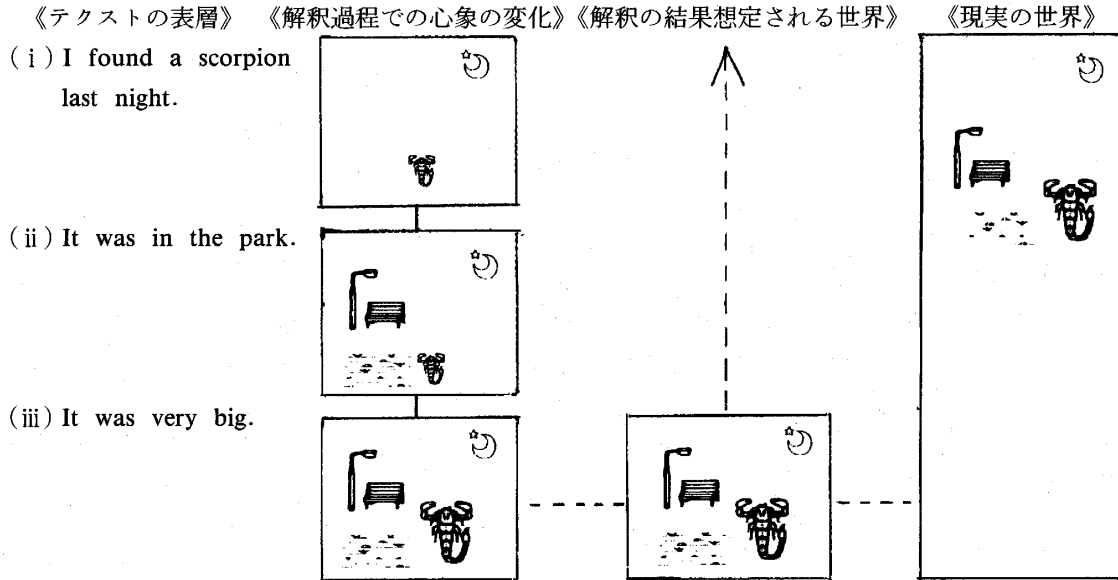


図 1

1つの節は解釈されて1つの心象を生じるが、節が連続的に解釈されるにつれて、心象は段階的に変化する。しかし、叙述型テキストの場合、この心象の変化は『読み手が想定する世界』の変化を反映するものではない。読み手は、テキストを(いったん)解釈し終わった時点で心に構成された世界が初めから存在するものと想定するのである。そして(テキストの表現とその解釈が適切なものであれば)、「事実の報告」のテキストでは、この想定された世界が現実の世界に対応することになる。

第2の談話の型は、調理法や取扱説明書がその典型で、形式的には命令文の連続、内容的には各種の「指示」であるから、テキストの展開に伴って指示対象である外界の物体の様態が変化する。この型のテキストを「指示型」と呼ぼう。もちろん、指示対象の物理的変化は、テキストの解釈に従った実践の結果であるので、まずは読み手がテキストを解釈する過程で、その頭の中で指示対象の像が変化するのであり、それが実際の調理なり製品の取り扱いという行動を伴う場合には、読み手の物理的な働きかけによって素材が何らかの変化を受け、料理が作られたり目標とする製品の状態が作られたりするるのである。この型の談話を例(5)を用いて次のように図に示す:

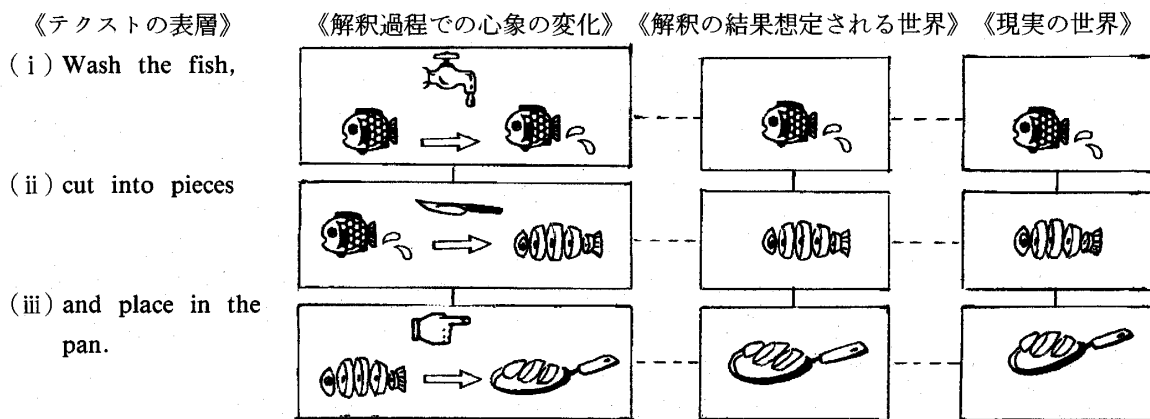


図 2

重要な点は、これら2つの談話の型が、談話である以上先行情報の累積と集約を行うが、そのしかたと質が大きく異なるということである。

4. 「指示型」テキスト

以下では先に概観した2つの談話の型について、実際のテキストを用いてさらに検討する。ただし、「指示型」のテキストについては、Sato(1994)、佐藤(1996)で詳しく論じているので、この型については簡潔に述べ、「叙述型」のテキストについて比較的詳しく考えて、これらの型を比較してみようと思う。

まず、指示型テキストの公式(6)と、この型に分類される調理法のテキスト例(7)、それに(7)の図式的表示を見たい。

(6) (i) [V_i+N₁] (ii) [V_j+ [N₁·V_i-en]₂] (iii) [V_k+ [N₂·V_j-en]₃] ...

- (7) 1. Make the plain pasta dough: sift the flour₁ onto a working surface in a mound, using a sieve or a flour sifter. With you fingers, make a well in the centre of the flour₂.
2. Lightly beat the eggs with a fork and add to the well in the flour₃, with 2.5 ml (1/2 tsp) salt.
3. Gradually mix in the flour₄ from the sides to make a firm dough. If the dough is sticky, add more flour. ...

(Anne Willan, *Look & Cook: Italian Country Cooking*)

TEXTUAL COHESION:

CONCEPTUAL COHERENCE:

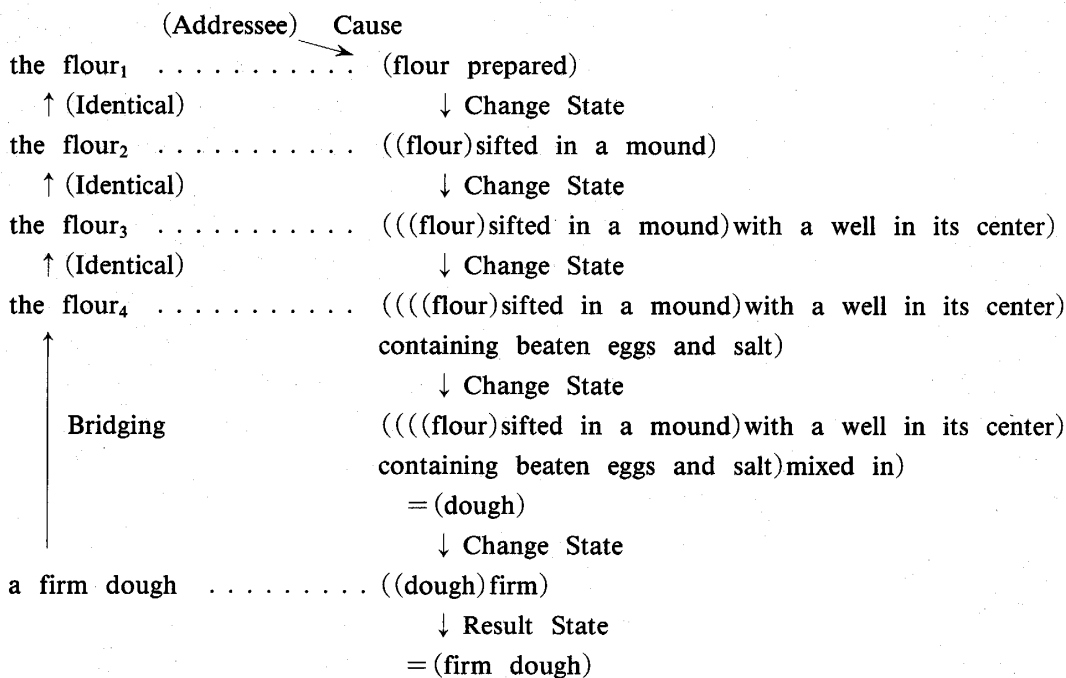


図3

この図式は、テキストの主題となる要素、すなわち「話題」(topic)が、テキストの表層上(左側)、およびテキストの解釈の結果である概念上(右側)、どのように展開するかを示したものである。左側は Martin(1992)の 'reference chains' を用いて表示したもの、右側は Langacker(1991)の 'action chain' および Croft(1991)の 'causal chain' を応用した表示である。

このパスタ生地を作るテキストに関して注目したいのは、flour と dough という語形上の交替にもかかわらず、その指示内容は連続的な変化であるという点である。これまで説明してきたように、flour₁ から

flour₂, そして flour₃ と進むにつれて, その指示内容は先行文脈の情報を集約しながら, 概念上の変形をなしていくわけだが, そうした変化は, 同一名詞類の反復という形からして, テクストの表層には全く現れない. これがある時点で別の語句に唐突に交替したように見えるのだが, 概念的にはそれまでと同様の変容の過程を持続しているに過ぎないのである.

5. 「叙述型」テキスト

今のものと比較しながら考えたいのが次の叙述型のテキストである. これは, 出来事をそのまま報告する, 新聞記事に代表されるテキストだが, この種のテキストでは, テクストの話題となる 'participant' は主に Halliday (1985/1994) の言うところの 'relational process' ('x is a' や 'x has a' の過程) や 'verbal process' ('話し手' (Sayer) と '内容' (Quoted/Reported) から成る過程) の主語の位置を占めるために, 指示型の例のように, 指示対象が変容することはないように見える.

始めに叙述型テキストの公式を提示し, それから具体例を検討することにしよう.¹⁰

(8) (i) [N₁+V₁] (ii) [[N₁+V₁]₂+V₂] (iii) [[N₂+V₂]₃+V₃] ...

(9) [記事の見出し] Japanese Writer Is Awarded Nobel Prize

STOCKHOLM—Kenzaburo Oe, a Japanese writer who has been heavily influenced by his nation's humiliation during World War II, was awarded the Nobel Prize in Literature on Thursday.

Mr. Oe, 59, was cited for a "poetic force" ...

Mr. Oe is the second Japanese writer to receive the Nobel literature Prize ...

Mr. Oe, born in the village of Ose on the island of Shikoku, was the third son of a distinguished samurai family. He is known as a staunch opponent of nuclear weapons and a proponent of human rights ...

(*Herald Tribune International*, October 14, 1994)

TEXTUAL COHESION:
(instantial)

Kenzaburo Oe ← a Japanese writer



Mr. Oe



Mr. Oe ← the second Japanese writer



Mr. Oe ← the third son of a distinguished samurai family



(次の頁へ続く)

CONCEPTUAL COHERENCE:

Kenzaburo Oe:

[Japanese writer
awarded Nobel Prize

[...
awarded Nobel Prize
59 years old

[...
59 years old
second Japanese writer to receive
Nobel Prize

[...
second Japanese writer to receive
Nobel Prize
born in Ose, Shikoku
third son of a samurai family

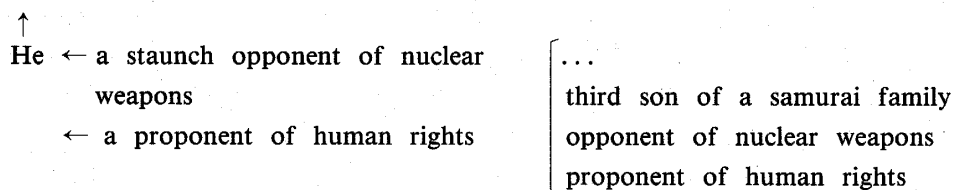


図4

テキストの進展に伴って、Kenzaburo Oeなる人物に関する情報の累積が生じるが、そのことによってこの人物の存在自体に何らかの変化が起こることはないし、また我々がこの人物のアイデンティティーに変化が生じると認識することもない。変化するのはテキストを介して我々がもつ、あるいは作り上げるこの実在に対する像である。つまり、節(情報単位)を経るたびごとの情報の集積によって人物のキャラクターが徐々に組み立てられ、より細密な心象が描かれていくのである。

次に、例(9)とは異なって、情報の集約が表現に明示的に現れている場合を見てみよう:

(10) [英国王室の4人の写真付;記事の見出し] A Right Royal Education

No way on earth could PRINCE WILLIAM, 13, go off to Eton without a gaggle of press types—some 300 of them—to record each and every moment. Reunited temporarily at least, the rest of William's family—PRINCE CHARLES, PRINCESS DIANA and brother PRINCE HARRY—helped the fledgling Etonian make a royal impression. They took tea with other students and parents, and then Wills signed the entrance register. Though young master Windsor will live with 49 boys and is to be treated no differently from anyone else, let it be noted that he affixed H. R. H. to his signature.

(*Time International*, Sept. 18, 1995)

the fledgling EtonianはPRINCE WILLIAMを指示しているわけだが、後者から前者へのつながりに唐突さが全く感じられないのは、第1節でPRINCE WILLIAMの特徴が13[years old], go off to Etonという表現によって描写されており、the fledgling Etonianという名詞類は、これを踏まえたうえで登場するからである(すなわち、A 13-YEAR-OLD PERSON='fledgling', A PERSON WHO GOES TO ETON='Etonian')。言い換えれば、the fledgling EtonianはPRINCE WILLIAMとだけ結束関係をもつのではなくて、先行文脈全体と結束的なのである。

これと一見対照的なのが、young master WindsorによるPRINCE WILLIAMの指示である。young masterはPRINCEから自然に導かれる表現だが、Williamがウィンザー家のyoung masterであると同定することはこのテキストからだけではできないのであって、同定には、そのこと自体をすでに知っているとか、PRINCE CHARLES, PRINCESS DIANAという表現からこの記事がウィンザー家即ち英国王室に関わるものだと確認できる等の、文化的知識が読み手に必要である。しかしこの文化的知識も、多くはマスメディアを通して言語的に獲得されたものだろう。すると、この2項の'shared knowledge'に基づくつながりは、「目下のテキスト以前に生じたテキスト情報の集約」(具体的には、書き手・読み手に共通の記憶)に基づく結束関係であると言うことができる。

6. 結 論

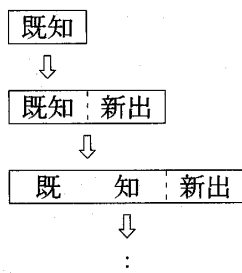
以上の考察をまとめてみよう。例(7)の調理法のテキストに代表される一連の手続きを示す指示型テキストは、話題となる指示対象の存在様態の変化をもたすが、そうした変化を導いてこそこの種のテキストは初めて実際に役に立つと言える。その一方で、(9)のように報告する叙述型テキストでは、現に存在する事実を伝えるのが目的なので、テキストの展開によって事実が変化したりしてはいけないのである。こうしたテキストのジャンルについての認識の上に立って、改めて主張したいことは、今述べたようなテキストの目的と機能の相違にもかかわらず、テキストの理解という観点から眺めてみると、どちらの型のテキストの場合にも、一定の継時的な概念化という心的操作が働いており、これこそが理解の本源的な過程であるということ、したがって、談話の展開や結束性を問題にするときに、テキストの背後に生じる概念化の過程を考慮することが不可欠であるということである。

注

- 1 Brown & Yule(1983), Beaugrande(1985), Fillmore(1985)がこの見方を早い段階で提示しており、最近では、McCarthy(1994)がラディカルに次のように述べている:

By 'world of discourse' is meant the accumulating shared and mutual knowledge that the text can refer to and add to as the discourse unfolds. The 'text' is but the verbal record of the interaction that creates that world. (p.268)

- 2 池上(1975:8章)は、テキスト分析の2つの主要な型を「微視的なアプローチ」と「巨視的なアプローチ」としてまとめている。すなわち、前者は文と文との情報上のつながり、後者はテキスト全体の生成を調べるものである。
- 3 より正確には「情報単位」(information unit) (Halliday 1994:295)と言うべきだろうが、これの典型的な現れが「節」(clause)なのでそう呼ぶことにする。
- 4 例えば池上(1975)は文と文とのつながりについて、「後続の文は先行する文によってすでに提示された情報の一部を繰り返すと同時に、それにさらに新しい情報を加えて発展させる」(p.456)と述べている。
- 5 次のように大まかに図示されることがある(池上 1985:64):



- 6 このつながり、すなわち結束関係(cohesion)を、Halliday & Hasan(1976)は、(1)reference, (2)substitution, (3)ellipsis, (4)conjunction, (5)lexical cohesionの5つに、Halliday(1985/1994)は、(2)と(3)を合わせて4つに分類している。
- 7 Langacker(1987/1991)の示した考え方は根源的かつ包括的で、文を超えたレベルの問題にも非常に示唆的ではあるが、談話あるいは結束関係の問題としては論じられていない。
- 8 解釈上、先行節の情報が後続節の情報に付加しない類がある。例えば:
 (i) Mary may like John; she may not like him.
 例(i)を解釈したときに、Maryの特徴として何も記述できないことに気づく。これは、モダリティー表現 may が節の確定的解釈を拒むためと考えられる。
 (ii) Mary likes John; she likes Tom, too.
 他方(ii)のケースでは、解釈の結果例えば:

Mary: [likes John]

[likes Tom]

といった人物の特徴記述ができる。

(i)のような節のつながりはもちろんしばしば生じるが、このパターンだけで談話が展開することはま
ずないと思われる。それは、前提にすべき先行情報が不確かなままではそれを基盤にして話を進めるこ
とができないからである。したがって、これをテキストの1つの型として考慮する必要はないものと思
う。

9 Brown & Yule(1983:201ff.)は、調理法のテキストを用いて「オンライン・プロセス」の問題を提示して
おり、山梨(1992:57ff.)は、この論点を英語と日本語のテキストで検討している。

10 この例(9)では情報の累積が隣接しない節で行われている(一般に新聞記事では、最初のパラグラフ
で全体の「論点」(issue)、以下のパラグラフで「詳述」(elaboration)という構成をもっていると考えられ
る)と見られるので、「結果/産物としてのテキスト」の観点から 'rhetorical structure'(Fox 1987)の分析
を試みることができるだろうが、議論を複雑にし過ぎるのでここでは触れないことにする。

引用文献

- Beaugrande, Robert de. "Text Linguistics in Discourse Studies." In T. A. Van Dijk, ed., *Handbook of Discourse Analysis*, Vol.1, pp.41-70. New York: Academic Press. (1985).
- Brown, Gillian and George Yule, *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press. (1983).
- Croft, William. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: Chicago University Press. (1991).
- Fillmore, Charles J. "Linguistics as a Tool for Discourse Analysis." In T. A. Van Dijk, ed., *Handbook of Discourse Analysis*, Vol.1, pp.11-39. London: Academic Press. (1985).
- Fox, Barbara A. *Discourse Structure and Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press. (1987).
- Halliday, M. A. K. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold. (1985/1994).
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan, *Cohesion in English*. London: Longman. (1976).
- 池上嘉彦. 『意味論』. 東京:大修館書店. (1975).
- 池上嘉彦編. 『意味論・文体論』「英語学コース」4. 東京:大修館書店. (1985).
- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Copenhagen: Munksgaard. (1909-49). Reprinted, London: Allen & Unwin. (1954).
- Langacker, R. W. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.1/2. Stanford: Stanford University Press. (1987/1991).
- McCarthy, Michael. "It, This and That." In M. Coulthard, ed., *Advances in Written Text Analysis*. pp.266-275. London: Routledge. (1994).
- Martin, J. R. *English Text*. Amsterdam: John Benjamins. (1992).
- Sato, Katsuyuki. "Condensation and Transformation of Information in Text." *Journal of Humanities*(『人文学会論叢』), Vol.15. pp.1-18. (1994).
- 佐藤勝之. 「結索性と過程としてのテキスト」『武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編)』第43巻. pp.9-15. (1996).
- 山梨正明. 『推論と照応』. くろしお出版. (1992).